

# 『奥義抄』 卷頭の目次について

日比野 浩 信

—

藤原清輔の『奥義抄』は上巻・中巻・下巻・下巻余からなり、それぞれの巻頭に目次が付されている。版本には「目録」とあるが、他の伝本にはこれに該当する言葉は無い。例えば『古今和歌集目録』『拾遺抄目録』などの「目録」は、総歌数や巻毎の歌数、歌人別歌数等を記すものであるし、頭昭の『勅撰和歌作者目録』なども、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌抄』の作者別歌数を記すものである。何より、清輔自身の関与したと考えられる『和歌現在書目録』などは、和歌に関する書物を分類して、名称とともに、巻数、歌数、編著者、成立年などを記したものである。よ

って、ここに取り上げる『奥義抄』の巻頭に付されたものは、各巻の項目や歌語等を、本文の内容に従って順次記すものであり、「目録」と言うには不適當であり、「目次」と呼ぶことにする。版本の「目録」の語は、出版の際、便宜上添加されたものと考えてよいものではなからうか。次いで、自分の各々の項目、特に上巻の項目を「標題」、中・下巻において釈を施すために掲げられた歌を「標題歌」、また、目次に記された各々の題目、語句を「目次題」と仮に呼称したいと思う。

ここでは中・下巻巻頭の「目次」の真偽や流布本の誤りなどを中心に、その性格についても若干考えてみたいと思う。現在最も流布していると思われる本文は「日本歌学大系」所収本文であり、基本的にはこれに拠ることとする。

参考までに、『奥義抄』と同じく清輔の手になる『袋草子』の始めにも、その内容を示す目次が付されている。これについては、『故撰集子細』の『万葉集』の条の一部である「一、人丸難及大同朝事」と「一、万葉或称大同朝疑桓武時事」を目次の項目としており、他の項目とは性質を異にする一書をも項目化していることから『袋草子注釈』では「目次は後人の所為とみるのが穏当であろう」としておられ、『袋草子考証』<sup>(三)</sup>でも（本書では「目録」としておられる）、これに加えて「誦文歌」の項が立てられていないことにも触れ、「注釈」の説くごとく、後人が便宜のために付したもので、清輔の書いたものではなからう」としておられ、共に異議を立てるまでもなく従うべき見解であろうと思われる。

## 二

さて、中・下巻の目次であるが、両巻とも「釈」の部であり、標題歌を一首出してその中の語句の釈や、歌の意味について述べるという点で一致しており、共に、上巻・下巻余の目次題の立て方とは性格を異にするものであると思

われるので、敢て一括してとらえてみたいと思う。

中巻は目次には「奥義抄中釈」とあり、「後拾遺歌三十八首」「拾遺歌二十一首」「後撰歌四十九首」「古歌四十八首」とし、「合 百五拾六首」とされている。また、下巻は「奥義抄下釈」とあり、「古今歌百五十六首」として「一 ひづ」から「百十六 かひがね」までの百十六の目次題をたて、更に「短歌」として「一 かくなは」から「七 不死葉」、「詞」として「八 めど」から「十 あがた」、「人名」として「十一 龍」から「十四 海童の女付いろに」の十三項目を目次題に加え、「問答 此中歌十六首 合百三十一首」とする。

中巻の標題歌で「日本歌字大系」において通し番号を付されたものは、それぞれ目次にあげられた歌数と一致し、また、下巻において通し番号を付された標題歌も百十六首であり、これも目次と一致する。伝本によつては数の異なるものもあり、それらについては後述したい。ただ、「問答 此中歌十六首」とあるのは判然としない。ここである「問答」は、当然下巻の中でのものであると考えるべきであろう。下巻の中で、問答の形式を有する箇所が一、五、七、十六、二十五、三十三、七十二、七十三、百九（二回）

の計十箇所あるが、その中に歌は十首しか見当たらないのである。しかし、管見に入った伝本のうち、版本以外のほとんどの伝本に見られ、何らかの妥当性があるはずではあるが、ここでは不明としておく。

さて、中・下巻「釈」の部、二百七十二の表題歌と目次題についてその性質をみる上で、いくつかのパターンをあげながら考えてみたいと思う。ただ、これからあげるものが、表題歌と目次題の關係を示すすべてのパターンを網羅するものではなく、ごく大まかな見方によって抽出するものであることをあらかじめお断りしておく。本分を引用するにあたり、それぞれの始めに、目次にある歌集名と目次題を（ ）に入れて示す。

(後拾遺 五 たままくず)

五 あさぢはらたま、くくずのうらかぜのうらがなし  
かる秋は来にけり

玉まく葛とはくずのかづらではたまのやうにまきすゑ  
たればいふなり。

(拾遺 一 さくらがり)

一 さくらがりあめはふりきぬおなじくはぬるとも花  
のかげにかくれむ

このさくらがりを、或人先達の申し、は、さといふは  
あと云ふ詞なり。(中略) 中ごろの人の歌にも、

春がすみはなぞのやまをあさたてばさくらがりとや  
人のみるらむ

とよめり。これさといふ詞の義はあらず。

まず、これらは目次題の語句が標題歌の中の語句であり、  
また本文の内容はその語句の釈をしているもので、目次題、  
標題歌、本文のすべてに一貫性がみられるものである。い  
わる「難語釈」の見本とでもいえるものであろう。目次題  
に「付」とするものもあるが、それらのうち、

(後撰 二 たかさご) 付あしびき

二 山もりはいはむたかさごのをのへのさくら  
をりてかざ、む

これは播磨國の高砂にはあらず。山の一名をばたかさ  
ごと云ふなり。をのへとは山の尾の上と云ふなり。

(中略) 又山をば足引という。それは日本紀にみえた  
り。(後略)

(後撰 四十四 いもせ うっし人)

四十四 むつましきいもせの山のなかにさへへだつる  
雲のはれずもあるかな

是ははらかなのなかに、こゝろよからぬことありてよめる歌なり。いもせとはいもうとせうとなり。これは山ふたつの名なり。いもの山せの山とてならべる山なり。又めをとこをもいふ。古歌に云、

かひすらもいもせぞなべてあるものをうつし人にてわがひとりぬる

これはめをとこなり。たゞをんなをとこと云ふ事に侍めり。うつし人とは萬葉には現人とかけり。うつしごゝろなどいふも現意とかけり。(後略)

などは、まず目次題の語句の釈、そして「付」の語句の説明を付け加えたものであり、「付」の語は必ずしも標題歌の中に含まれる語句ではないが、目次題の語句からの派生的な語句であつたり、例歌としてあげられた歌の中に含まれる語句であつたりするようであるが、あくまで付属的、ついでといった感がある。まさに「付」とするにふさわしいものであると思われる。すべてのものがこれらの例のようであれば、何ら問題はないであらう。しかし、疑問とせねばならぬ例も多い。次にあげてみたい。

(後拾遺 三十 たちつくり江)

三十 よろづよを君がまほりといはひつゝ、たちつくり

江のしるしとをみよ

(古今 四十七 まゆねかき)

四十七 まゆねかきはなひ紐とけまつらむかいつしか

こむと思ふわぎもこ

(古今 五十九 わがなもみなど)

五十九 おほかたはわがなもみなどこぎいでなむよを

うみべだにみるめすくなし

(古今 百十 みのくはいづら)

百十 みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟

のつなでかなしも

(古今 短歌 二 えふの身)

二 えふの身なればなほやまず

これらは、目次にあげられていながら釈を施されていない標題歌とその目次題である。目次題の語句はすべて標題歌の中にみられる語句ではある(ただし、「古今 百十 みのくはいづら」とあるのは「みちのくはいづら」とすべきである)。また、初めは釈が付されていなかったものの、後になつて付け加えられたと思われるものもある。

(後撰 五 よひながら)

五 よひながらひるにもあらなむ夏なればまちくらす

まのほどなかるべく

〔この歌心得がたし。よひながらひるにもあらなむといへるは、よも日もみな、がらひるにてあれかし。よるひるといふ、わきまへなくばくれをまつといふこともなくて、人にあはむとおもふになつの日のくれがたきなげきもあらじとよめるにや。〕

(後撰 二十八 あまのまくかた)

二十八 いせのうみのあまのまくかたいとまなみながらへにける身をぞうらむる

〔あまは鹽やくとはしほひのかたのすなごをとりて、す、ぎあつめて、そのしるをやくなり。さてそのすなごをばもとのかたにまきくするをあまのまくかたといふなり。(中略)〕

追考、齋宮女御

まくかたにあまのかきおくもしほぐさけぶりはいかにたつそらぞなき

數本にあまのまてがたとあり。但し、假名のく・て、まざる、字なり。書寫誤歟。〕

これらは、現存伝本のうちでは版本にのみみられる釈の記述であり、「日本歌学大系」では「」に入れ、活字のボ

イントを小さくして區別している。この「あまのまくかた」などはよく引かれる例であり、『六百番歌合』『六百番陳状』『僻案抄』『三代集之間事』などにみられるように、崇徳院に献上されたものには釈が付されていなかったが、後になって、清輔が二条院に『奥義集』を献上した際にはこれに釈が施されていたとされている。これをみると、標題歌をあげながら釈を付さなかったものが確かに在り得たことが知られ、単なる釈文の脱落ではないことは、目次題が標題歌に含まれる語句であることから、釈を施す予定で標題歌があげられていた、と考えられることからわかることであろう。

更に、流布本系の伝本と異本系の伝本は、その増補、改訂などが、清輔自身の手によってなされた結果生じたものであると考えられるのであるが、流布本、異本共に釈のない標題歌が存することや、その目次題が存する上に、誤写と考え得るもの他にはほとんど目次題に異同がないことから、清輔自身の所持していた本に、既に目次が付されていたと推測されてくるのではなからうか。なお、ここにあげたものうち、「古今 四十七 まゆねかき」については問題があり、後述する。

続けて、他の例をあげていきたい。

(後撰 四 あしびきの)

四 あしびきの山した水はゆきかよひことのねにさへ  
ながるべらなり

是は人の琴ひくをき、てよめる歌なり。琴には流水曲  
といふものあれば、それをひくをきけば水ながる、に  
もよせてよめるなり。又凡ながる、も、水調と云ふ調  
もある也。

(古今 百六 そゑにとて)

百六 そゑにととすればか、りかくすればあないひ  
しらずあふさきるさに

あふさとはあふさま也。きるさとはきさま也。とさま  
かくさまといふ心也。とするもあしく、かくするもあ  
し。いひしらぬわざかなとよめり。

これらは、目次題は確かに標題歌にある語句ではあるが、  
釈を施されているのが目次題の語句ではない。「四 あし  
びきの」の釈は標題歌のなかでは「水はゆきかよひことの  
ね」あたりに関する釈であろうと思われ、「あしびきの」  
については全く触れておらず、「百六・そゑにとて」では「あ  
ふさきるさ」の釈であるとはいえようが、「そゑにとて」

については全く触れていない。目次題が、その釈の内容を  
表していないことになる。確かに前者においては簡単な語  
句として目次題を立てることは困難かも知れないが、例え  
ば「ことのね」などとするほうがより内容と直結するであ  
ろうし、後者においては「あふさきるさ」を目次題とすれ  
ばよさそうなのである。仮に後人が目次を付したと考へ  
るならば、その内容からして、このような目次題を立てる  
ことはないのではなからうか。恐らく清輔自身があくまで  
その便宜の面から目次を付したととらえることも考えられ  
そうである。

(古今 九十七 まひさし)

九十七 春されば野べにまづさくみれどあかぬ花まひ  
さしにたえずみるべき

春されとは春くればといふ也。萬葉には春されとかき  
たれども、彼集は深さをあらはし淺きをかくせる集也。  
秋されば花さき紅葉すとよめり。夕されなどいふも夕  
暮也。まひさしは誠に久しくたえで見るべき花とよめ  
る也。

これは、目次題の語句がむしろ「付」とされてもよさそう  
なものの例である。釈の主眼は「春されば」におかれてい

る。単に釈を施す順序の問題だけではなく、内容的にも目次題は「春されば」などとしてもよさそうなものである。このような例は他にも多いようである。

(後拾遺 十六 いぶきの山)

十六 かくとだにえやはいぶきのさしもぐささしもし  
らじなもゆるおもひを

いぶきのたけはつねに火のもゆるなればかくよむなり。

追考、草は春もゆるものなればそへよめるにや。

これは、標題歌にある語句を目次題としてあげるのだから「いぶき」であり、釈文にある語句であるならば「いぶきのたけ」となるのであるが、「いぶきの山」とある。「奥義抄」と同じく清輔の手による「和歌初学抄」の「所名」の「山」の項に

丑 かみ山 ケフソミルトモ (中略) 同 いぶ

きの山 サシモグサヨム、モノライフニソフ

とあり、また上覚の「和歌色葉」には

又國々の中に所々の名あり。ふるくよりみな人のよみ

おき、き、なれたるは、山

山城 くらぶ山 (中略) いぶきの山

さしも  
草あり

などとある。これにより、清輔自身も、また一般的にも「いぶき」といえば「山」ととらえていたらしいことが推察されよう。必ずしも標題歌中の語句や釈文中の語句を目次題としていないのである。このようなものをもう一例あげると次のようなものもある。

(後撰 十六 鳥のそらね)

十六 あまのとをあけぬくといひなしてそらなきし  
つる鳥のこゑかな

是はもろこしに孟嘗君といひける人、おほやけにたがひ奉りて、隣國へにげてゆきけるに、よなかばかり函谷關に到りぬ。かのせきは鳥のこゑをき、て後にせきのとをばあくるところにて、よふかくていづべきやうもなかりければ、あひしたがへるもの、なかに、鳥のこゑまねぶ人のありけるしてなかせたりければ、あけぬなりとて關の戸をあけたるより、にげてゆきける事のあるを思ひてよめるなり。

範兼の「和歌童蒙抄」第八に

鶏

にはとりのかけのたれをのみだれをのながきこ、ろもおもはざるかも

(中略)

とりのそらね、論衡曰、孟嘗君叛出<sup>レ</sup>秦。關鶏未<sup>レ</sup>鳴。關不<sup>レ</sup>開。下座賤客鼓<sup>レ</sup>臂爲<sup>二</sup>鶏鳴<sup>一</sup>。而群鶏和<sup>レ</sup>之。乃得<sup>レ</sup>出焉。未<sup>下</sup>牛馬以<sup>二</sup>同類<sup>一</sup>相應<sup>上</sup>而、鶏人忽以<sup>二</sup>殊音<sup>一</sup>相<sup>二</sup>和之<sup>一</sup>。駘未乙以効<sup>二</sup>同類<sup>一</sup>也。とあり、「色葉和雜集」卷二には、

一、とりのそらね

後| 天の戸をあけぬくといひなしてそらなきしつる

鳥の聲哉

清輔云、是はもろこしに孟嘗君といひけるひと、おほやけにたがひ奉りて、となりの國へにげて行きけるに、

(後略)

のようにある。共に同内容であり、この孟嘗君の故事が「鳥のそらね」を指すものであるとされていたとみて差し支えなからう。これもやはり、一般的な言い習わしであったと考えられる。また、目次という点からみると、「奥義抄」を引用する「色葉和雜集」にも「とりのそらね」としていいることから、少なくとも引用された時点で既に「鳥のそらね」という目次題が「奥義抄」にあったとみてもよいように思われる。ただ、ここにあげた「いぶきの山」「鳥のそ

らね」共、標題歌からは全く考え付かない語句というわけではなく、標題歌中の語句を一般的に、もしくは通俗的な語句に言い換えたものであるととらえればよいように思われる。

しかし、次にあげるようなものは、標題歌には全くみられない語を目次題としている。

(後拾遺 二十一 上陽人

付楊貴妃 まぼろし)

二十一 こひしくば夢にも人を見るべきにまどうつあ

めに目をさましつ、

文集に、蕭々暗雨打窓聲といふ事をよめるなり。是は上陽人のことなり。(中略) 楊貴妃がしたしき人の安

禄山といひけるもの、(中略)

おきつしま雲井のきしをゆきかへりふみかよはさむまぼろしもがな

此歌もこの事を思ひてよめる也。まぼろしは方士也。

標題歌のなかには「上陽人」は勿論のこと「付」の「楊貴妃」も「まぼろし」もみられないが、釈文の中にこれらの語は確かにある。この標題歌は「後拾遺集」の一〇一五番の歌であり、その詞書に「文集の蕭々たる暗き雨窓を打つ聲といふ心をよめる」とあって、釈文の始めに、この詞書

とはほ同じ文をあげているが、むしろこの詞書の出典内容の説明であるといえるようである。標題歌の中の語句から目次題を立てるのであれば「まどうつあめ」などが適切かもしれない。後人が『奥義抄』をよむための便宜上、目次を付したとするならば、標題歌からはなれた目次題を立てたりするのであろうか。やはり目次は、標題歌、釈文、そして詞書をも熟知していた清輔自身の手によるものと考えてよいのではなからうか。同様の例として、

(後拾遺 二十二 王昭君)

二十二 みるたびにかゝみのかげのつらさかなか、らざりせばか、らましやは

をあげることができる。標題歌のなかには「王昭君」という語はないが、その釈文には「王昭君といひける女御の：」とある。この歌は『後拾遺集』一〇一八番の歌で、一〇一六番の詞書を受けるもので、「王昭君をよめる」とある。

以上のようにみえてくると、『奥義抄』の目次題は必ずしも厳密な態度で、一定の法則のもとに付されたものではないということがいえるであろうと思われる。だが、かえってこのことにより、目次が清輔自身によって付されたものであると考えられるのではないであらうか。もし、後人の

手によるものであるならば、逆に厳密な態度を期し、歌語や歌意の釈という点からも標題歌中の語句を目次題とすであろうし、釈文の内容と齟齬するような目次題の立て方はしないのではあるまいか。目次題の語句が標題歌や釈の内容と直接結び付かないようでは、それは、目次としての用をなさないと思われるからである。更に付け加えるならば、目次題の語句に伝本間の異同はほとんどないようである。あつたとしてもそのほとんどは、誤写、もしくは標題歌中の語句の取り出し方の長短であるようである。『奥義抄』の系統の違いは清輔自身の増補、改訂などによるものと考えられそうなのであるが、異系統の伝本においてもほぼ同じ目次が存するというのは、やはり系統分裂以前に、つまり清輔自身が付したものであると考えられるのではないだろうか。ただ、目次が本文と同時期にできたものかどうかは、はっきりさせることはできないが、標題歌と釈の内容を熟知している清輔が、本文に従って、本人のみが了承できればよい、備忘と便宜のために付したものであるとみることはできないであらうか。

このように「奥義抄」の目次は清輔自身が付したものであるととらえた上で、なお疑問が残る箇所もいくつかあるようである。それらについてみてみたい。

(後拾遺 二十六 山鳥頭白 かめ井)

二十六 やまがらすかしらもしろくなりけりわが、  
へるべきときやきぬらむ

燕の太子丹といふ人、秦始皇の時秦にゆけり。本國にかへらむとするをみかどゆるさず、鳥のかしら白くなり、馬に角のおひたらむ時にかへすべきよしをのたまふ。丹そらをあふぎてなげくに、たちまちにからすのかしらしろく、馬に角おひたりければ、みかどとむるにあたはず、かへしやり給ふなり。

「やまがらすかしらもしろく」を「山鳥頭白」として目次題とすることには別に不都合はないが、「かめ井」とあるのはどうであろうか。標題歌中に無いのみならず、釈にも全く見当たらない。この前後の目次は次のようにある。

二十三 うらなるたま 二十四 かめ井 二十五 む

なしき船 二十六 山鳥頭白 かめ井 二十七  
巻にちぎのこがね

「山鳥頭白」の二つ前に「二十四 かめ井」とあるのが注意されよう。この本文は

二十四 よろづよにすめる亀井の水さやはとみのをが  
はのながれなるらむ

聖徳太子をばとみのをがはによせたてまつりて云ふなり。文殊の歌よりおこれることなり。さればかの太子の志おき給へる所なれば、そのながれといふ也。

とあり、『後拾遺集』一〇七一番の歌であるが、その詞書は「天王寺にまゐりて、かめ井にてよみ侍りける」とあり、標題歌の中にも「亀井」があることから、間違ひなからう。これが誤つて「山鳥頭白」の後に挿入されてしまったのではないだろうか。諸伝本をみると、「日本歌学大系」の底本である(九)では、「廿四 かめ井 廿五 むなしきふね 廿六 山鳥頭白。かめ井」とあつて、挿入したような形式となつてゐる。また、(豊)では「廿六 山鳥頭白 かめ井」のようにあり、(内零)では「廿六 山鳥頭白 かめ井」とする。(内抄)では「うらなる玉、むなしき舟 山鳥頭白 かめ井」の順となつてゐるが、これは誤りで

あろう。その他の伝本では「かめゐ」を「山鳥頭白」の後に続けて「付」のような形で記すものはない。なぜ「かめゐ」が挿入されるに至ったかは定かではないが、あるいは、版本などは一行に二つの目次題を記すが、このような場合は「かめゐ」と「山鳥頭白」が隣り合わせになることからの誤りかもしれないし、他の目次題の「付」の長さの関係や番号を付さないことから、大東急記念文庫蔵本のように

王昭君 うらなる玉 かめ井

むなしき舟 山鳥頭白 一卷に千々の金

となつて、「山鳥頭白」の右下に「かめ井」のくるものがあることなどから、目移りしてしまう可能性も完全に否定することはできないであろう。ともあれ、ここに「かめゐ」があるべきではない、ということはいえるであろう。

次に存在自体が疑問視されるものをあげてみる。前述、釈を施さない標題歌の中に「古今 四十七 まゆねかき」があつた。下巻にありながら、『万葉集』の歌である。中巻の「後拾遺」「拾遺」「後撰」、下巻の「古今」とあるなかで、各々の歌集のなかに見出せない歌は、これが唯一である。歌の前に「同集云」とあるところから、清輔が『万葉集』のこの歌を『古今集』の歌と勘違いしたなどは考

え難い。その本文は、

四十六 おもふともこふともあはむ物なれやゆふ手も  
たゆくどくる下ひも

人に戀らるゝ人は、下ひもとくといふことのあるなり。

(中略) 萬葉にも、

こまにしきひものむすびめときわけていはひてまで  
どしるしなきかも

こまにしきとは高麗錦とかけり。又云、

人めにはうへもむすびて忍びにはしたひもときてこ  
ふるよぞおほき

(中略) 又めづらしき人をみむとてもはなひ紐とくと

よめり。同集云、

四十七 まゆねかきはなひ紐とけまつらむかいつしか

こむと思ふわざもこ

四十八 いでわれを人などがめそおほふねのゆたのた

ゆたに思ふこゝろを

ゆたのたゆたとは(後略)

となつており、四十六のなかの「下ひもとく」からの派生として「はなひ紐とく」についても触れているのであり、この「まゆねかき」の歌は「はなひ紐とく」の例歌である

ことは瞭然である。諸伝本を見てみよう。

(九) 四十六ゆふてもたゆく 四十七まゆねかき 四十八

ゆたのたゆた

(書) 四十六ゆふてもたゆく 付りまゆねかき 四十七ゆ

たのたゆた

(豊) 四十六ゆふてもいゆく 四十七付まゆねかき 四十八

ゆたのたゆた

(志) 四十六ゆふてもいゆく 四十七付まゆねかき 四十八

ゆたのたゆた

(版) 四十六ゆふ手もたゆく付まゆねかき 四十七ゆたの

たゆた

(東) ゆふてもたゆく付まゆねかき ゆたのたゆた

(内抄) ゆふてもたゆく付まゆねかき ゆたのたゆた

これらを見ると多くの伝本においては「付」として「まゆねかき」があることがわかる。(豊)(志)などでは「付」としながらも通し番号を付すという誤りを犯しているが、あくまで「付」であり、一つの目次題として立てるべきではないものであることがわかる。これによって更にいえることは、目次題に番号は付されていないかつたということである。元来、個々に番号が付されていたならば、このよ

うな誤りは起こり得なかつたはずである。本文の標題歌についても同様である。そもそも標題歌に通し番号、一つ書きなどが付されていたならば、例歌であるはずの歌に番号を振ってしまつて、標題歌と誤ることなどなく、逆に後述のように標題歌を例歌のようにとらえてしまうようなことではないのではなからうか。目次、標題歌共に番号などが付されていないかつたために、目次の「付」を一個の目次題と誤り、それに従つて、例歌を標題歌のようにとらえてしまつたのではあるまいか。ともあれ、この「まゆきかき」は目次題では「付」とし、本文においては標題歌から除外して考えるべきであらうと思われるのである。

さて、この「まゆねかき」を標題歌ではないとするならば、下巻目次の初め「古今歌百十六首」及び、終わりの「問答 此中歌十六首 合 百三十二」という記述に矛盾が生じることとなる。「古今歌百十六首」は管見に触れた現存伝本のすべてにみられるものであり、「合 百三十二首」は(版)を除くすべての伝本にある(ただし(東)では「百三十三」とあつたようであるが、その前にやはり「問答 此中歌十六首」があり、誤写としてよいであらう)ので、後人が付したものは思われない。先にあげた諸伝本の目

次のうち、(豊) (志) では、「まゆねかき」を「付」としながらも番号を振ることで最後的には百十六首となっているが、(書) (版) では「百十五 かひがね」で終わっている。とすれば、どこかにもう一首、標題歌とすべきものを見出すべきではなからうか。これを解決してくれるのは、現存伝本では(東)と(内抄)そして(三)の書き入れである。(東) (内抄)の目次には「かひかね」のあとに「ねこし山こし」という目次題があるのである。そして、これら三本には、それに見合った釈も記されているのである。すなわち、

百十六 かひがねをさやにも見しかけ、れなくよこほりこせるさやの中山

此歌普通には、よこほりくやるなどはべり。(中略)  
かひがねをさやかに見るべきに、心なくよこほりふせる山かなといへるは今すこしよくきこゆ。心なく四郡にはこえたと。

かひがねをねこしやまこしふくかぜを人にもがもや  
ことづつてやらむ  
に続けて、

かひかねは甲斐の白嶺也とそ或物には侍る。ねこし山

こしとあるは、ねこえ山こえふく風とよめるなり。人にもかもやとあるは、かの風の人にてかな、ことづつてやらんといへるなり。

とあるのである。ここでは(東)の本文をあげたが、他二本もほぼ同様である。この「かひがねをねこしやまこし」の歌を標題歌とすれば、まさに百十六首となり、問題も解消される。

「かひがね」を目次題として「かひがねを」で始まる歌の後に、同じく「かひがねを」で始まる歌をあげているので、例歌のようにとれなくもない。しかし、中・下巻の本文の形式においても何の説明もない歌をあげることによって、その釈の終わりとすると他に見当たらない。歌をもって、その釈の最後とするものは

拾遺 十二「しかのあまの」の歌

同 十九「いはしろの」の歌

後撰 三「あをやぎの」の歌

古歌 四「むばたまの」の歌

同 二十五「きかばやと」の歌

古今 四十「おくやまの」の歌

同 五十四「ゑひにける」の歌

同 五十八「故郷の」の歌

同 七十五「みつせ河」の歌

同 九十九「ほと、ぎす」の歌

同 百七「たましたの」の歌

以上、十一例をあげることができるが、すべてこれらの歌

の前にはそれぞれ「萬葉に云」「さてよみ給へる歌」「兼輔御歌云」「歌に云」「古歌云」「兼盛歌云」「又兼盛歌に云」

「後撰にも」「菅原の道真が地獄繪を見てよめる歌云」「太后の百番歌合歌云」「萬葉に松浦仙人歌云」などとあり、

このような点から「かひがねをねこしやまこし」の歌のみが何の説明もない例歌をあげ、積の結びとしていると言い難いのである。また、標題歌掲出の順序は各集において乱れている箇所もあり、確かな論拠とはなり得ないかもしれないが、参考までに「かひかねをさやにもみしか」の歌は『古今集』一〇九七番歌、「かひがねをねこしやまこし」の歌は同じく一〇九八番歌であり、ここに標題歌としてあげられていても不自然なものであるとはいえないのである。

よって、この「かひがねをねこしやまこし」の歌は標題歌であるとしてとらえることができるのではあるまいか。

流布本系統の伝本にこの歌の積がないのは、単なる脱落と考えられなくもないが、むしろ清輔自身が、標題歌としてあげておきながら積を施していなかったものに、他にも見られるような例と同じように、後になって積を加えたとみてよいのではないだろうか。

#### 四

以上、述べてきたことを簡略にまとめると、『奥義抄』の目次は『袋草子』の目次とは違い、清輔自身によつて付されたものであるらしく、番号などを付けずに目次題を列挙するだけのものであつたようである。目次題のあげ方は、必ずしも法則的ではなく、どちらかといえば、かなり自由なあげ方がなされているようである。これは清輔自身の便宜、備忘の目的のためであろう。また、目次、及び目次題の在り方や、それにより、標題歌の在り方をもとらえ直すべきであり、流布本を若干訂正することもできるようである。

ここでは、標題歌の掲出順序や、その出典となる歌集との関係、他の歌学書との比較や積の性格等々、触れること

ができなかったが、これらを含め、『奥義抄』を考へる上で問題とすべき点は甚だ多い。いずれ、稿を改めて考へてみたいと思う。ご教示、ご叱正を乞う次第である。

注

(一) 小沢正夫氏、後藤重郎氏、島津忠夫氏、樋口芳麻呂先生、

共著（塙書房刊）

(二) 藤岡忠美氏、芦田耕一氏、西村加代子氏、中村康夫氏

共著（和泉書院刊）

(三) 管見に入った伝本のうち、中巻・下巻・の存するもの、及び略号の次の通りであり、これに従って使用した。

志香須賀文庫蔵 (九条家旧蔵本)	○	○	九
書陵部蔵本	○	○	書
豊橋市立図書館蔵本	○	○	豊
内閣文庫蔵零本	○		内零
志香須賀文庫蔵零本		○	志
慶安五年版本	○	○	版
大東急記念文庫蔵本	○	○	東
			中巻
			下巻
			略号

三手文庫蔵校合版本 (今井似閑書き入れ)	○	○	三
内閣文庫蔵抄本	○	○	内抄
書陵部蔵零本	○		書零

この他に『奥義抄』の下巻のみを独立させて一書としたものに

①内閣文庫蔵「古今和歌灌頂部」

②国文学研究資料館初雁文庫蔵「古今集灌頂部秘歌百十六首注」

③志香須賀文庫蔵「俊成卿和歌庭訓」があり、版本には「問答」とだけあり、①②にはこの記述がない。

『奥義抄』の一伝本とするならば当然検討の材料とすべきであるが、今回はこれらのその特異性の上からも除外した。

②は西下経一氏「古今和歌集研究史」(『国語と国文学』昭和九・四)で触れられ、①については半田正義氏が「古今和歌灌頂部と奥義抄」(『歴史と国文学』昭和十一・十二)で考察しておられる。川上新一郎氏は「奥義抄伝本考」(『斯道文庫論集』第二十四号)において

「奥義抄」の現存伝本のほとんどすべてについて考察をされ、①②についても述べておられる。

③については従来知られていなかったものであるが、久曾神先生のご好意により、その存在を知らされ、調査させていただくことができた。本書は川上氏分類のⅡ類本（異本系）に属するもので、①②ほどの「奥義抄」との隔たりはなく、内容的にはほぼ「奥義抄」そのままとみてよさそうである。ただし、目次（本書においては「目録」とある）の在り方や、目次題にはかなりの異同がある。参考までにその始めの部分を引用すると次のようである。

俊成卿和歌庭訓上

目録上巻

ひち こほれる をりける

とふひ なかす きえなく （後略）

のようになつており、意識的に目次題を改変しているようである。

この問題を含め、本書については稿を改めて検討したいと考えている。

（四）久曾神先生「奥義抄に就いて」（「立命館文学」四卷

四号 大正十二・四）、「日本歌学大系」第老巻 解題、原田芳起氏「大東急本奥義抄管見」（「かがみ」八昭和三十八・三）、川上氏前掲論文

（五）（豊）の校合はその親本にあつたものであるらしい。この「イ」は「頭白」が他の本には無いことを示すようであり、（内零）の他、（版）（宮零）にも「頭白」は無い。（三）は「頭白」と書き入れる。

（六）ただし、「拾遺歌二十一首」は本文の標題では「拾遺抄」とされており、「拾遺集」ではなく「拾遺抄」によるものであるとすれば、「四 わがやどの菊のしら露けふごとにかくよつもりてふちとなるらむ」の歌は「拾遺抄」には無い歌であるとしなくてはならない。ただ、上巻「盗古歌証歌」以外では「拾遺集」のみにある歌をあげる際には「拾遺集に云」、「拾遺集」「拾遺抄」の両方にあるものをあげる際には「拾遺に」などとしているようであり、「拾遺集」「拾遺抄」の両方を用いていたと思われる、また、標題歌の掲出順序、掲出歌数、部類などからは、「拾遺抄」のほうがより可能性が高くなる。現在のところは「拾遺集」「拾遺抄」の両方を用い、中巻の標題歌としては「拾遺抄」を重

視した上で『拾遺集』歌も一首取り入れたものであると考えておきたい。これについては期を得て考察したい。

(七) 『興義抄』において「同集」とするのはその直前にある集の名を受けるものであり、ここでは「万葉集」の歌であることを指しているのである。

(八) 他にも掲出順序という点でみると「日本歌学大系」などでは「百十一 み(ち)のくはいつら 百十一 まがねふく」の順であり、本文も同様であるが、(版)(東)(内抄)では、目次、本文ともこれが逆になっており、『古今集』の掲出順序と一致するのは後者である。

#### 追記

貴重な御蔵書の閲覧を許可された、久曾神先生、大東急記念文庫、その他諸機関に深く感謝申し上げます。また、この稿は平成四年十二月二十日の名古屋平安文学研究会での口頭発表をもとに作成した。発表の際、種々ご教示くださいました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

(大学院博士後期課程一年)